

指定管理鳥獣対策事業交付金（令和7年度） 効果的捕獲促進事業 事例集

効果的捕獲モデル・技術開発タイプ		対象鳥獣	ページ番号
都道府県	概要		
北海道	・「定置網式エゾシカ集中捕獲システム」の実証	ニホンジカ	P.1
宮城県	・イノシシ捕獲事業におけるツキノワグマの錯誤捕獲防止	イノシシ（ツキノワグマ）	P.2
山形県	・囲いわなを用いたニホンジカの捕獲実証	ニホンジカ	P.3
栃木県	・ドローンを活用した忍び猟による効果的捕獲	ニホンジカ	P.4
新潟県	・シャープシューティング	ニホンジカ	P.5
富山県	・GPS等を活用した越冬地把握と効果的な捕獲技術の開発	ニホンジカ	P.6
福井県	・ドローンでの調査結果に基づく捕獲の効率化の検証 （センサーカメラとの比較）	ニホンジカ	P.7
岐阜県	・ドローンによる追込み捕獲	ニホンジカ	P.8
静岡県	・ドローンとセンサーカメラの併用による効果的な捕獲活動の実証	ニホンジカ	P.9
滋賀県	・ドローンを活用した大型資材運搬 ・潜り込み式ゲートを活用した囲いわな	ニホンジカ	P.10,11
島根県	・クマの錯誤捕獲防止効果の高い、跳ね上げ式足くくり罠の効果検証	ニホンジカ（ツキノワグマ）	P.12
山口県	・センサーカメラを活用した踏み場所の特定による、 効果的なくくり罠捕獲実証	ニホンジカ	P.13
福岡県	・誘導柵を用いたくくり罠捕獲技術の実証	ニホンジカ	P.14
熊本県	・人工塩場等を利用した囲いわなによるメスジカの誘因捕獲	ニホンジカ	P.15
鹿児島県	・組み立て式囲いわな及びAIゲートを活用したニホンジカ等の捕獲	ニホンジカ	P.16
沖縄県	・島嶼部における外来イノシシの根絶に向けた効果的捕獲手法の検討	イノシシ	P.17

- 技術名：「**定置網式エゾシカ集中捕獲システム**」の実証（ニホンジカ）
- 実証地域：北海道北部地域（留萌・小平区域）
- 実証時期：令和7年10月～令和8年3月
- 委託先：ワイルドライフプロ・島嶼生物研究所受託コンソーシアム

1. 事業の背景・課題

- ・ 北海道エゾシカ管理計画（第6期：R4～R8）に基づき個体数管理の取組を進めているが、エゾシカの推定生息数・農林業被害額等は依然高水準で推移しており、個体数の削減に向けて一層の捕獲推進が必要。
- ・ 日本海側には、道路沿いの段丘斜面や牧草地などエゾシカが多数出没しているにもかかわらず捕獲することができない、捕獲条件が整わない場所が広くみられるといった課題があり、シカの移動ルート上にネットを張り、ネット内の誘引餌の方へ誘引することで、大量捕獲や捕獲の省力化が期待される。

2. 事業の結果・効果

①捕獲手法

追い込み部120m、誘導部110m、計230mからなる柵を設置し、柵内に誘引したエゾシカを銃により捕獲

②誘引手法

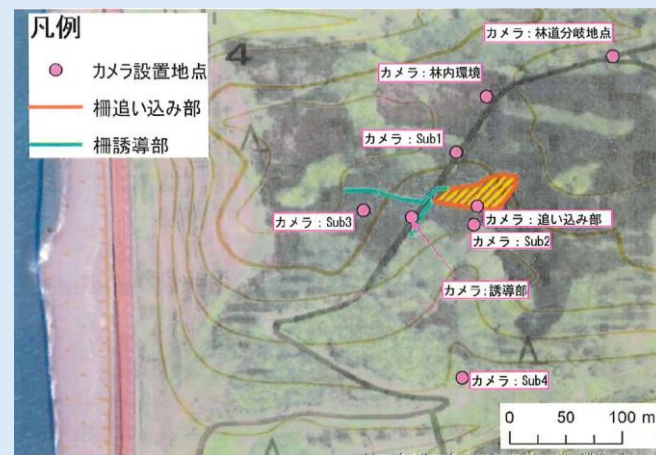
エゾシカの馴化を図るため、捕獲作業開始前の12月から給餌を開始し、捕獲作業についても誘引の期間を確保するため、原則週2回給餌を実施した。

③実施結果

捕獲作業中に柵内に出現したエゾシカ45頭のうち、38頭を捕獲。

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・ 出現したエゾシカのほとんどを捕獲することに成功した。本手法は群れ単位での捕獲を狙えるため、作業1回に対してより多くの捕獲数を期待できる。また、群れ単位で捕獲することで、スマートディアの発生抑制に繋がる。
- ・ 柵で囲う点から、囲いわなと類似した手法となっているが、囲いわなと比べ、安価かつ設置・撤去の簡易なネットを柵の資材に用いているため、設置・撤去の労力及び資材費の点から差別化が可能
- ・ 警戒心が高まり餌でエゾシカの誘引が困難になった場合の対策として、柵の範囲拡大や、柵の設置箇所を複数箇所にするなど、検知範囲をカバーできる方策をとることが考えられる。



誘導柵を用いた捕獲模式図



誘導柵設置状況



捕獲実施状況

- 技術名：イノシシ捕獲事業におけるツキノワグマの錯誤捕獲防止
- 実証地域：宮城県北部地域（栗原市区、大崎市及び加美町）
- 実証時期：令和7年7月～令和8年3月
- 委託先：合同会社東北野生動物保護管理センター

1. 事業の背景・課題

- ・ 県内ではイノシシとツキノワグマの行動圏が重複しており、クマの錯誤捕獲が相次いでいる。そのため、効率的なイノシシの捕獲の検討と、錯誤捕獲の防止に向けた対策が必要である。
- ・ こうした状況を踏まえ、生息状況調査などの科学的な根拠に基づき捕獲場所を選定し、その場所で錯誤捕獲防止効果があるとされるくくり罠を複数種類用いて捕獲を行い、それらの有用性や効果の検証を行うことを目的とする。

2. 事業の結果・効果

①効率的なイノシシの捕獲の検討

- ・ イノシシとクマの同所的生息状況を明らかにするため、自動撮影カメラトラップ調査及び痕跡調査による生息密度分布図を作成。

②錯誤捕獲の防止に向けた対策

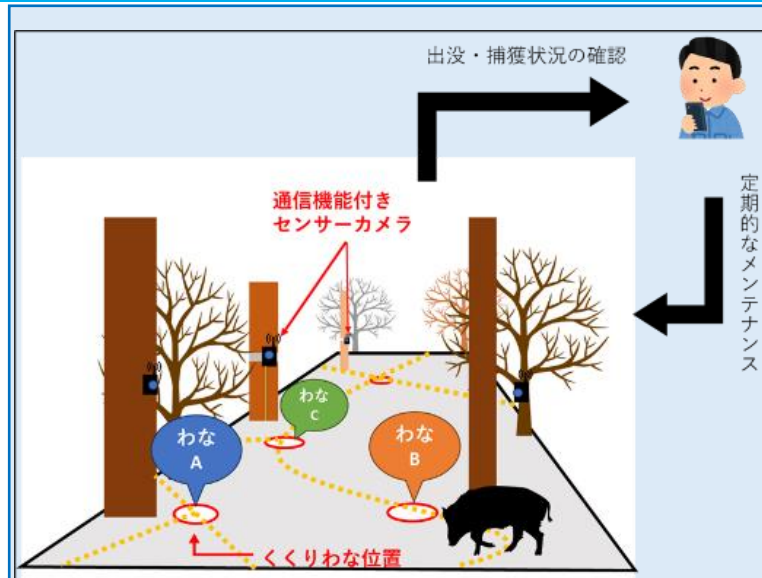
- ・ ICTを活用した錯誤捕獲防止機能付きくくり罠による捕獲実証試験を3種類（※）のくくり罠を使用して実施。
（※）使用わな「いのしか御用」「ベアウォーク」「ST式」

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・ ①自動撮影カメラトラップ調査、痕跡調査の結果を用いて生息密度分布図を作成。密度分布図やイノシシ及びクマの目撃・出没情報等から捕獲実証試験候補地を選定。その結果、設置した10台でイノシシが撮影され、うち7台でクマが確認されたことから自動撮影カメラトラップでの場所の選定について生息密度分布図による同所的生息状況についての精度が認められた。
- ・ ②3種類すべてのわなでクマによる踏圧を確認したが、いずれのわなにおいても錯誤捕獲は確認されなかったことから、錯誤捕獲防止機能について一定の効果が認められた。

【課題点】

- ①データがない空白域をできる限り減らしたうえで解析を行わないと精度が低くなる。
- ②錯誤捕獲はないが誤作動や中型獣の錯誤捕獲、手入れ方法などの運用を適切に講じる必要がある。



捕獲されたイノシシ



わなを踏むクマ

- 技術名 : 囲いわなを用いた二ホンジカの捕獲実証
- 実証地域 : 山形県天童市、米沢市、鶴岡市（温海地区）
- 実証時期 : 令和7年8月～令和7年11月
- 委託先 : 一般社団法人山形県猟友会、株式会社BO-GA

1. 事業の背景・課題

- 山形県ではニホンジカの生息密度が低く、錯誤捕獲対応に係る体制が整っていないことから、くくり罠の捕獲を制限している。一方で、侵入初期から定着期に移行しつつある当県では、ニホンジカの捕獲体制を整える必要があり、特に、無積雪期に足跡から存在を確認することが困難であり、銃猟による捕獲は難しいことから、誘引したうえでのわな捕獲に頼る他ない状況である。
- その中で錯誤捕獲を防ぐ効果的な捕獲方法の確立が必要であり、その一手法として県内において使用実績がほとんどない罠いわなの捕獲実証を行った。

2. 事業の結果・効果

- ・低密度生息地域である山形県において、自動撮影カメラを複数台設置したことにより、これまでボイストラップでのみ生息が確認されていた地域で生体が複数回撮影された。
- ・各地域の猟友会員の協力のもと、それぞれ囲いわなを1基設置し、誘引物としてヘイキューブ及び鉾塩を周辺の複数個所に設置し誘因に努めたが、囲いわな周辺での出没は自動撮影カメラで確認されたものの、いずれの地域でも誘引物への採食行動は認められず、囲いわなへの進入も認められなかったことから、捕獲には至らなかった。
- ・各地域で従事した囲いわなを使用したことのない捕獲者に対し、囲いわなの設置について普及を図ることができた他、誘引なしに捕獲は難しいことについても一定程度理解を得られた。

3. 事業の評価結果・改善点等

- 各種関係者間の調整や囲いわなの調達に苦慮したことから、周辺にニホンジカが利用可能な植物が繁茂している中において誘引期間が十分にとれず、誘引物に餌付く前に実証期間が終わってしまった。
- 囲いわなは設置条件が他のわなよりも厳しく地形を選ぶことから、植物が繁茂している中において誘引可能な諸条件の整理を行い、誘引が完了したうえでその場所に適した種類のわなを用いるなど、ニホンジカを確実に誘引し捕獲できる条件の検証が必要である。



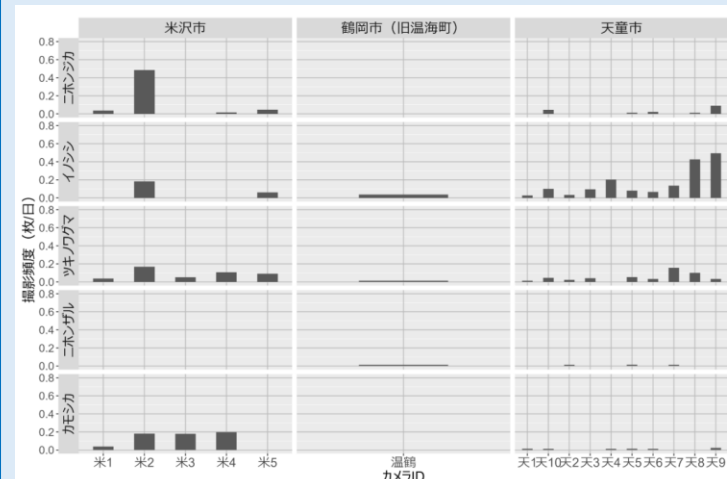
天童市で設置した囲いわな



誘引に使用したヘイキューブ



誘引物の配置と撮影された獣種（天童市）



各地域の撮影頻度

- 技術名：ドローンを活用した忍び猟による効果的捕獲（ニホンジカ）
- 実証地域：日光市（鶏頂山地域）
- 実証時期：令和7年6月～令和8年3月
- 委託先：株式会社ForestersPRO

1. 事業の背景・課題

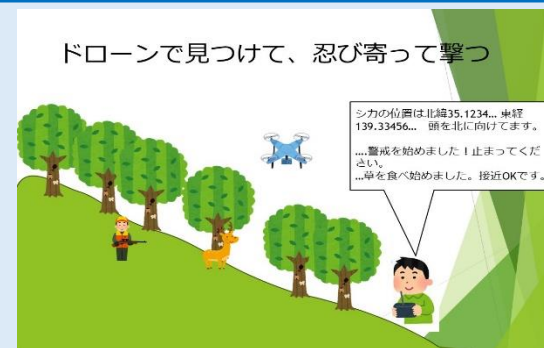
- ・ 従来の銃猟において、射手が自ら山中を歩いて捕獲対象を搜索する必要がある。
- ・ 銃による捕獲を効率的に行うため、ドローンを活用し獲物の位置情報を共有しながら捕獲を行うことの有効性を検証する。

2. 事業の結果・効果

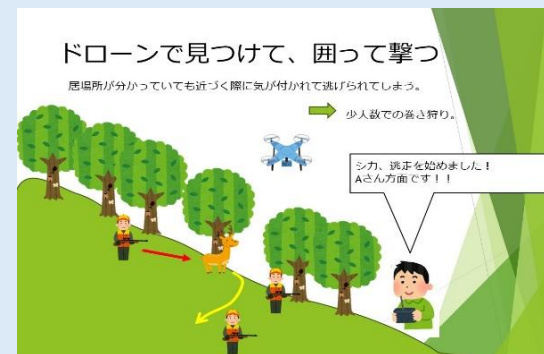
- ①捕獲方法
 - ・ ドローンを活用した銃猟による捕獲を実施。
- ②実施体制
 - ・ 令和7年度は射手1名、ドローン操縦者1名の2名体制で実施。
- ③実証結果
 - ・ 捕獲実績 R6：13頭、R7：13頭
 - ・ ドローンでシカを追跡し、得た情報を整理することで捕獲成功につなげることができた。

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・ 事前にドローンで発見してから捕獲を試みた場合は、通常の銃猟よりも2倍程度捕獲が成功する確率が高くなった。
- ・ ドローンを使用することで発見できる頭数が増加し、発見した個体について対策を立て状況を確認しながら捕獲できることは射手にとっても精神的な余裕ができるため、ドローンを活用した捕獲は有効であることが実証された。



ドローンの運用方法（忍び猟）



ドローンの運用方法（少人数での巻き狩り）



ドローンからの映像（左側が赤外線カメラの映像、右側が可視光カメラの映像）

- 技術名：シャープシューティング（ニホンジカ）
- 実証地域：十日町市
- 実証時期：令和7年9月～令和8年2月
- 委託先：一般社団法人 新潟県猟友会

1. 事業の背景・課題

- ・ 本県におけるニホンジカの捕獲数は、平成20年度までは年間数頭であり生息域も上越地域の一部に限定されていた。しかし徐々に捕獲数が増加し始め、令和2年度には1,192頭（前年度比764%）と急増し、生息域が拡大しているものと推測されている。その後は捕獲数は減少傾向であったが、R6年度は再び1,120頭へ急増（前年度比255%）した。
- ・ 隣接県ではニホンジカによる深刻な農林業被害が発生していることから、本県においても個体数増加に歯止めをかけ分布域の拡大を縮小させるため、捕獲の強化とともに、効果的な捕獲方法の検討が課題となっている。
- ・ 本県のスキー場において、ニホンジカが出没しており、その多くが採餌行動によるものと分かったため、スキー場においてニホンジカを誘引し、一斉に銃猟で捕獲することで、雪国の特徴を生かした効率的な捕獲方法を開発するもの。

2. 事業の結果・効果

- ・ 9月 実施対象スキー場において採餌場とするエリアや誘因餌の配置場所等を整備。
- ・ 10月 ニホンジカの痕跡が見られた場所などに誘因餌や鉋塩を設置し餌付けを開始。
- ・ 12月 降雪によりようやく寄付きがみられたが、定着までは至らず。
- ・ 1月 短期間の集中的な豪雪による、ニホンジカのスキー場周辺の里地への移動を確認。
- ・ 2月 ニホンジカ4頭を捕獲。

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・ 県内のスキー場において、グレンデ等におけるニホンジカの採餌行動が確認されたことから積雪地帯における効果的な捕獲事業の開発を目指し、シャープシューティングを試みた。
- ・ 本事業により豪雪地帯では降雪中のニホンジカの生息地が安定しないことが分かった。
- ・ 今後は積雪期以外における効果的な捕獲手法の開発に向けて取り組んでいく。

実施地域



誘因餌の設置・補給



R7 餌は宙づり

R6 餌は地面や木に固定

- 技術名：**GPS等を活用した越冬地把握と効果的な捕獲技術の開発（ニホンジカ）**
- 実証地域：富山市、砺波市、立山町、朝日町など
- 実証時期：令和6年4月～令和8年3月
- 委託先：富山県自然博物園ねいの里、一般社団法人狩猟屋

1. 事業の背景・課題

- これまでの長野県側におけるテレメリー調査結果などから、近年北アルプス周辺へのシカの分布拡大が確認されており、生態系被害や農林業被害の発生が懸念されている。
- シカは季節移動を行っていると考えられているが、越冬地の具体的な場所や越冬地利用の実態は把握できていない。
- 高山帯でのシカ捕獲には莫大な資金及び人的コストが必要になるため、北アルプス周辺においては、低標高域の越冬地において効率的にシカを捕獲する技術の確立が求められている。

2. 事業の結果・効果

①GPS首輪の装着、移動ルートの調査

- R7年度は富山市2頭、砺波市3頭、立山町1頭にGPS首輪を取り付け。
- 過去に装着した個体を含め、計9頭の移動ルートを収集中。

②越冬地の把握

- 移動ルートデータ（過去分を含む）から、一部の個体で越冬地と考えられる場所を確認。

③越冬地での効果的捕獲技術の開発・検証

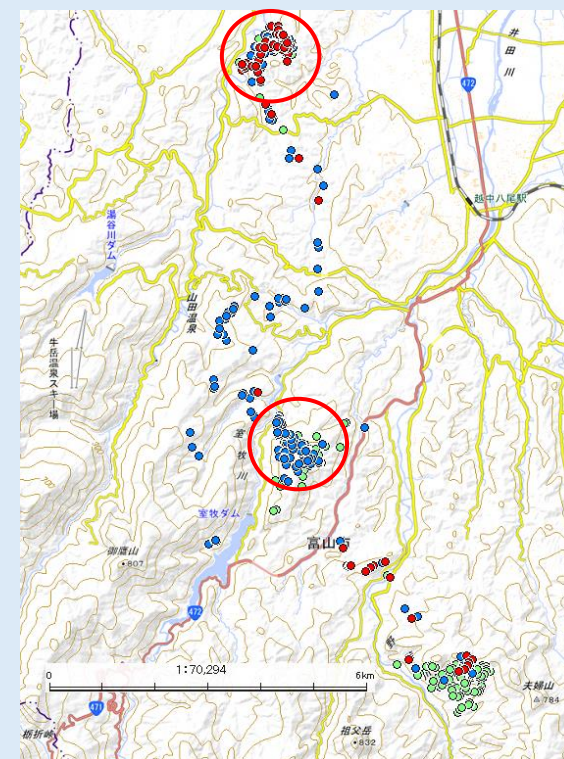
- 調査結果を活用した捕獲活動により、13頭（うちメス11頭）を捕獲。

3. 事業の評価結果・改善点等

- 把握した越冬地のデータを活用し、積雪期に銃器による捕獲活動を実施すれば、選択的にメスジカを捕獲できる可能性が高まることや、群れの多頭数捕獲や全頭数捕獲を目指すことができる。
- GPS首輪を装着したシカの群れだけでなく、越冬地として他の群れを確認することもできるため、多頭数捕獲の可能性が高まる。
- 特に下層植生の衰退が著しい富山市八尾地区において、今回の調査結果を活用した捕獲圧の強化を継続する。



GPS首輪の装着

大雪の降雪以降のシカの越冬地と考えられる場所の変化
(赤:12月、青:1月、緑:2月)

■ 技術名：ドローンでの調査結果に基づく捕獲の効率化の検証 （センサーカメラとの比較）（ニホンジカ）

■ 実証地域：福井県高浜町内

■ 実証時期：令和7年8月～令和8年1月

■ 委託先：株式会社BO-GA

1. 事業の背景・課題

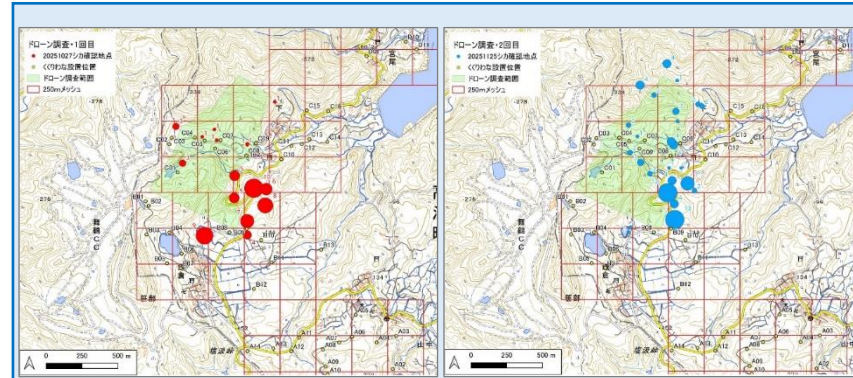
- ・福井県では、糞塊密度調査により広域エリアの推定密度は押さえられているが、より狭域のエリア内の生息状況を把握するには現場を踏査したり、センサーカメラ撮影による解析をしたりしなければならず、生息密度の高いエリアよりも、わなを仕掛けやすい場所や入りやすい場所を優先して捕獲作業が行われている。また、エリア内の生息密度が下がってからも捕獲作業を続けてしまうため、無駄な労力が発生してしまう。
- ・本事業ではドローンの赤外線カメラ撮影を活用した狭域エリアのシカの生息数調査結果とセンサーカメラでの生息密度調査結果を比較し、ドローンによって生息密度を把握しながら効率的に捕獲を行い、労力を低減させることが可能か検証した。

2. 事業の結果・効果

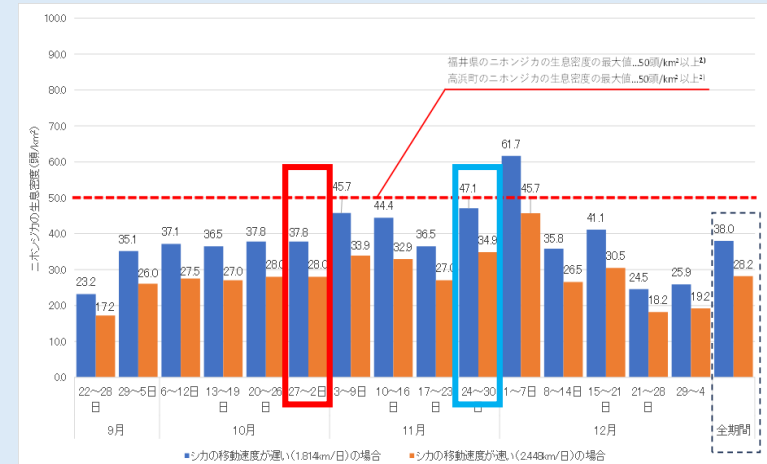
- ・捕獲作業の前後でドローン撮影を行い、センサーカメラでの生息密度調査結果と比較することで、ドローンによる生息状況の把握と捕獲の効果検証について評価した。
- ・今回の実証では、ドローン撮影によるシカの生息数把握とセンサーカメラでの生息密度調査結果はある程度一致しており、捕獲作業の効率化にドローン撮影が有用である可能性があった。

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・コストパフォーマンスを踏まえると、現時点ではセンサーカメラによる生息密度の把握が実用的であると考えられた。
- ・一方で、センサーカメラによる調査は結果を得るまでに一定期間のデータの蓄積が必要であるが、ドローンによる調査は即日結果を確認することができるため、場所や時期を変えても同様の結果が得られるか検証が必要であるが、生息密度を把握しながらの効率的な捕獲の実現に寄与する可能性がある。
- ・また、ドローンは、カメラを設置できない場所（安全管理上立ち入りが困難な場所や行政区域の境）や目視にくい場所のシカの生息状況の把握にも有用であった。



▲ ドローン撮影調査でのシカ確認位置図
（左:2026.10.27、右:2026.11.25）



▲ センサーカメラ調査によるシカの生息密度推移



◀ ドローンで撮影されたシカ

- 技術名：ドローンによる追込み捕獲（ニホンジカ）
- 実証地域：伊吹山周辺地域（揖斐川町）
- 実証時期：令和8年1月～令和8年3月
- 委託先：トランサム株式会社

1. 事業の背景・課題

- ・ 本県と滋賀県を跨ぐ伊吹山周辺地域においては、シカが極めて高い密度で生息しており、森林植生が食害を受け山肌の裸地化が生じ、土砂災害に及んでいる。
- ・ 当地域の森林植生の回復に向けたシカ対策として、ICT及び航空技術を活用した効果的な捕獲方法等を検証する。
- ・ 有人航空機による広域生息調査のデータをもとにドローンを用いたシカの追い込み捕獲について検討する

2. 事業の結果・効果

①有人航空機による広域生息調査

- ・ 有人航空機からの撮影でシカの生息状況を調査できることを確認した。
- ・ 伊吹山周辺では3月中旬の撮影でシカを3頭確認できた。

②ドローンを用いたシカの追い込み捕獲

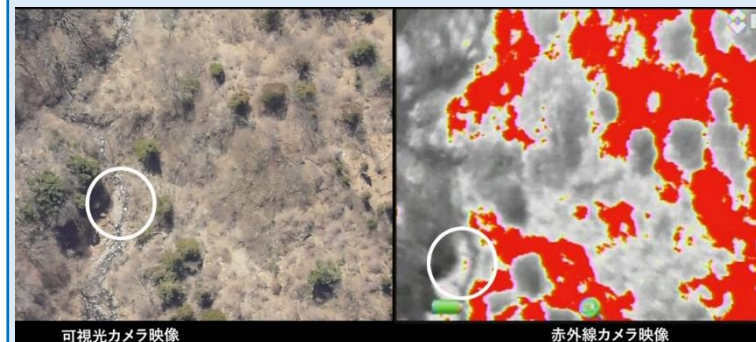
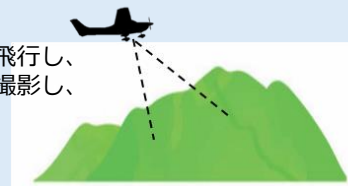
- ・ 令和8年度に実施予定

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・ 今回の調査は春先であったためシカがまだ山頂付近に生息していなかった。令和8年度は追い込み捕獲の前後で調査を実施し、シカの行動域の変化を検証する。
- ・ 有人航空機からの広域生息調査は、午前10時時点ですでに地表温度が上昇しており、赤外線カメラでシカを見つけづらくなっていた。そのため、令和8年度においては、早朝にかけて撮影を実施する。
- ・ また、令和8年度は広域生息調査の結果をもとに、ドローンを用いた追い込み捕獲の検証を予定している。

①有人航空機による広域生息調査

- ・ 調査地域の上空を有人飛行機で飛行し、可視光カメラと赤外線カメラで撮影し、個体数、生息場所を調査



可視光カメラ映像

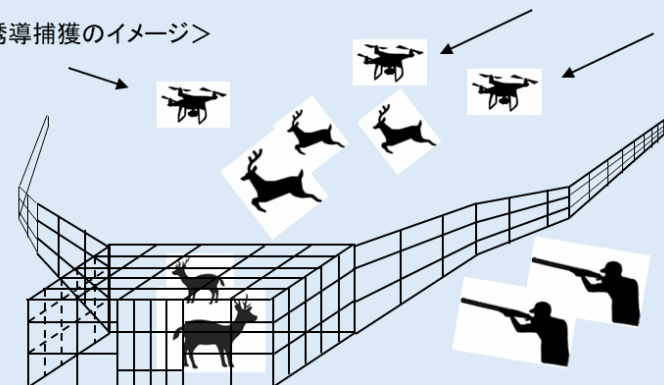
赤外線カメラ映像

有人航空機からの撮影の様子

②ドローンによる追い込み捕獲の検証（R8年度実施予定）

- ・ シカを追い込むための誘導柵をなを設置
- ・ 大型捕獲をなを中心とした効果的な捕獲方法を検証

<誘導捕獲のイメージ>



■ 技術名：ドローンとセンサーカメラの併用による効果的な捕獲活動の実証（ニホンジカ）

- 実証地域：静岡県小山町須走
- 実証時期：令和7年11月～令和8年2月
- 委託先：株式会社スカイシーカー

1. 事業の背景・課題

- ・小山町須走地域は、糞粒法からニホンジカが高密度に生息していることが推測されているが、県境であること、演習場やゴルフ場等地権者の了解が得にくい場所があること、捕獲従事者が少ないこと等から捕獲が進んでいなかった。
- ・ドローン及びセンサーカメラを用いてニホンジカの生息状況を調査し、撮影された頭数や移動方向等を捕獲従事者に提供することで、捕獲空白地でもより効率的な捕獲を促進する必要がある。

2. 事業の結果・効果

○事業の結果

ドローンに搭載された赤外線カメラにより生息状況を調査した。その上で、多く個体が確認された箇所周辺にセンサーカメラを設置し、移動の様子を調査した。調査結果を捕獲従事者に提供し、くり罠による捕獲を実施したところ、11月上旬～1月上旬までに31頭捕獲でき、捕獲効率（捕獲頭数/わな基数・日）は富士地域のR6年度管理捕獲の平均と比べ約2倍となった。1月上旬に実施した調査では、実証地域で確認されたニホンジカの数11月下旬の半分以下となった。

○効果

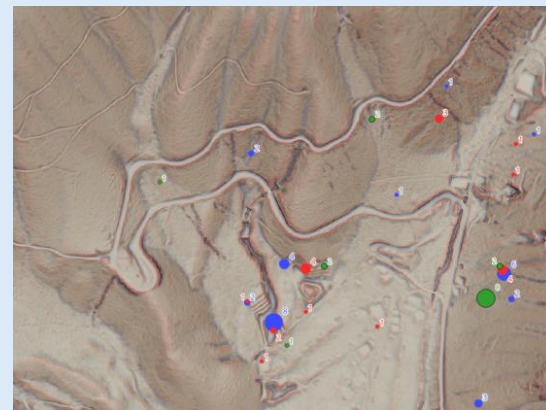
シカの出現数が多い地点や移動方向を把握できたことで、移動先の捕獲しやすい場所にくり罠を設置することができ、効率的な捕獲を行うことができた。

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・出現数が多い地点や移動方向を提供することで、制限の多い場所でもわなの設置場所を絞ることができ、少ない捕獲従事者であっても効率的な捕獲につながった。
- ・赤外線カメラによる調査は冬季が適しているが、今回の地域では地面が凍結してしまい、捕獲の期間が限られてしまった。より効果的な捕獲につなげるためには、捕獲地域に応じた調査時期の検討が必要である。



捕獲従事者への情報提供



ドローン調査結果



センサーカメラ調査結果

- 技術名：ドローンを活用した大型資材運搬（ニホンジカ）
- 実証地域：滋賀県米原市伊吹山
- 実証時期：令和7年10月～令和8年3月
- 委託先：株式会社野生動物保護管理事務所関西支社

1. 事業の背景・課題

- ・ 本事業地で実施したセンサーカメラ調査の結果から、ニホンジカの生息が多いエリアは判明しているものの、駐車場から遠く、人力での大型資材（囲いわな等）の運搬に課題があった。
- ・ ドローンを活用し、大型資材（囲いわな等）の運搬を行うことで、人力運搬と比較した効率的な資材運搬について検証した。

2. 事業の結果・効果

①ドローン運搬で削減できた時間等について

- ・ わな設置にかかる運搬をドローンで、撤去にかかる運搬を人力で実施し、比較検証を行った。
- ・ ドローンを活用することで、囲いわな1基、箱わな3基、ICT捕獲システム等の捕獲資材、合計895kgを計27往復、3時間19分の飛行時間で運搬できた。事前調査に捕獲事業者2名・ドローン事業者1名の計3名、資材の運搬に捕獲事業者3名、ドローン事業者6名の計9名が従事した。なお、設置にかかる運搬は上り勾配。
- ・ わなの解体、撤去、運搬を人力で行った際、捕獲事業者10名、作業にかかった時間は3時間半だった。なお、撤去にかかる運搬は下り勾配。

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・ ドローン運搬は事前調査も必要となり、人力による運搬よりも作業人日数は必要となったが、仮に設置にかかる運搬を人力で実施した場合、上り勾配であることから、より人工数・時間が必要であると推測される。
- ・ そのため、設置にかかる上り勾配の運搬はドローンを活用し、撤去にかかる下り勾配の運搬は人力という使い分けが、本事業地では有効であった。
- ・ ドライブウェイにより高標高域まで移動することができる本事業地においても、一定の有効性を示すことができたドローン運搬においては、より人力運搬が困難となる運搬距離が長い・急傾斜地など事業地でより有効な手段となる。



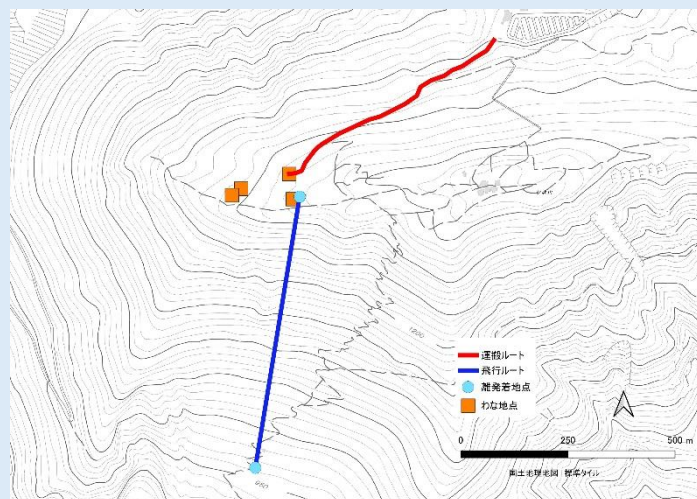
使用したドローン



運搬時の状況（麓）



運搬時の状況（山頂）



ドローンと人力の運搬ルートとわなの位置

- 技術名：潜り込み式ゲートを活用した囲いわな（ニホンジカ）
- 実証地域：滋賀県米原市（伊吹山）
- 実証時期：令和6年9月～令和6年12月
- 委託先：株式会社野生動物保護管理事務所関西支社

1. 事業の背景・課題

- ・伊吹山山頂付近には、ドライブウェイを活用した観光客が多いことから安全を考慮した捕獲手法である必要がある。また、捕獲個体の埋設が困難であり、搬出を前提とすることから、駐車場から近いエリアが求められるなど制約が多い。
- ・これらの制約により、捕獲地は少なく、同じ場所で継続した捕獲が可能な手法が求められる。
- ・捕獲時に大きな音が出ず、スレジカを生みにくいと言われる潜り込み式ゲートを活用した囲いわなを試行した。

2. 事業の結果・効果

①潜り込み式ゲートを活用した囲いわなによる捕獲

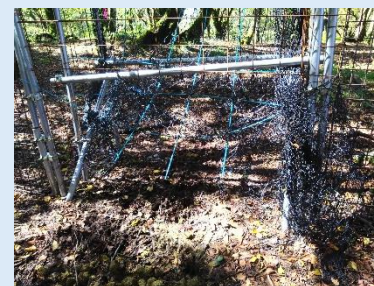
- ・事前誘引を行い、囲いわな内にシカを誘引し、潜り込み式ゲートにより捕獲することができた。
- ・既存技術でのゲートの高さの場合、伊吹山のオスジカが大型のためゲートが低すぎて角が絡まり落ちてしまった。

②継続的な捕獲

- ・囲いわなと併設したセンサーカメラにより、オスジカが複数頭誘引されていることがわかった。しかし、メスジカを中心とした群れが少なかったことやオスジカがネットに絡んでしまい場を荒らしたこともあり、継続的な捕獲には至らなかった。（オスジカ1頭捕獲）
- ・ゲートの高さを最大に上げた状態で捕獲1日後には囲いわな入口近くまでシカを誘引でき、10日後には檻内にも侵入した。

3. 事業の評価結果・改善点等

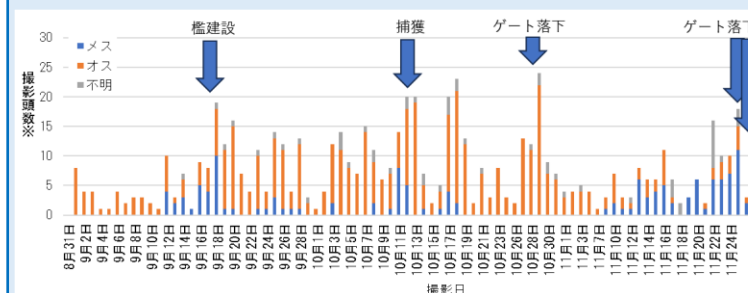
- ・潜り込み式ゲートを活用した囲いわなで、シカを捕獲することができた。
- ・一方で、継続的な捕獲には至らなかった。センサーカメラにより、メスジカを中心とした群れが少なかったことなどが要因と考えられ、場所を変え、再度効果検証が必要であると思われる。
- ・ネットのゲートは、オスジカが多い場合は引っ掛かりによる誤作動が多く不向きだった。ゲートの素材変更やICTを併用し高い位置からネットを落とす等により改善できると考える。
- ・捕獲後に囲いわな内部まで誘引するにはある程度の期間を要することから捕獲期間を長く設定することで、適切に効果を検証できると考える。



潜り込み式ゲート

オスジカ捕獲時の状況
(10月13日)

オスジカの角がネットに引っ掛かっている (10月13日)



入口正面からのセンサーカメラ撮影状況

※撮影頭数は同一個体が滞在し続けた場合は1頭として集計
 ※ゲート落下はオスジカの角が引っ掛かりゲートが落下し、侵入できない状態になった

- 技術名：クマの錯誤捕獲防止効果の高い、跳ね上げ式足くり罠の効果検証（ニホンジカ）
- 実証地域：島根県
- 実証時期：令和7年6月～令和7年12月
- 委託先：株式会社野生鳥獣対策連携センター

1. 事業の背景・課題

- ・ シカ生息頭数増加に伴い、くり罠の普及が急務だが、クマの錯誤捕獲増加が懸念
- ・ 奥山でのシカ捕獲においても、クマの生息地に重なるため、指定管理事業時にクマの錯誤捕獲が度々発生
- ・ ニホンジカの捕獲効率を維持しながらもクマの錯誤捕獲を防止するくり罠の検証が必要

2. 事業の結果・効果

- ① 輪の直径（12cmと15cm）によるイノシシ、シカの捕獲効率を検証した結果、輪の直径が違う場合でも、捕獲効率に差はありませんでした。
シカ：12cm 0.015頭・わな日、15cm 0.011頭/わな日
イノシシ：12cm 0.003頭・わな日、15cm 0.003頭/わな日
- ② 同様の条件でクマの錯誤捕獲発生確率を検証した結果、輪の直径が15cmの場合には錯誤捕獲発生頻度が高く、12cmでは低くなりました。

3. 事業の評価結果・改善点等

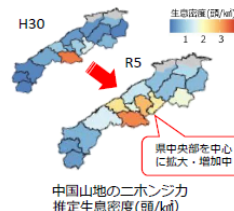
- ・ くり罠の径の違いによる捕獲効率を分析したことで、シカの捕獲効率の維持とクマの錯誤捕獲防止の両立が可能なわなの検証を実施でき、捕獲事業の安全管理の向上及びクマの保護管理の適正化を図れた。
- ・ 市販のわなに対応できるように、錯誤捕獲防止に向けたわなの特性をまとめパンフレットを作成したことにより、今後、錯誤捕獲数の減少が期待できる。

特集 12cmくりわなでニホンジカは獲れるのか？

～シカの捕獲強化とクマの錯誤捕獲防止の両立に向けた検証～

本特集の背景と目的

- ◆ 個体数増加が問題となっているニホンジカに対応するため、くりわなによる捕獲強化が最も効果的です。
- ◆ 一方で、くりわなによるツキノワグマの錯誤捕獲は非常に危険で、県内では毎年30件程度発生しています。
- ◆ くりわなによるシカの捕獲強化とツキノワグマの錯誤捕獲防止の両立が求められています。
- ◆ 今回、様々なくりわなのうち、シカの捕獲効率が高く、錯誤捕獲防止効果も期待できるくりわなの検証を行いました。



12cmと15cmのくりわなでは、何が違うのか？

島根県では、従来よりシカ、イノシシを捕獲するためのくりわなの輪の直径は15cm以内としてきましたが、鳥獣保護管理法ではツキノワグマの錯誤捕獲防止の観点から、12cm以内が基準とされています。シカやイノシシの捕獲効率や、ツキノワグマの錯誤捕獲の発生頻度において、12cmと15cmのくりわなの違いについて比較検証しました。

比較検証に用いたデータ

- ◆ 邑南町内で実施されたR2～R7年度の捕獲事業のデータを使用
- ◆ 県内で一般的な跳ね上げ式くりわなのデータを抽出して分析・比較
- ◆ 12cmくりわなは、計3事業で4,039わな日
- ◆ 15cmくりわなは、計4事業で8,915わな日



検証結果1 12cmと15cmでシカ・イノシシの捕獲効率に差はない

輪の直径	シカ捕獲数	シカ捕獲効率 (頭/わな日)	イノシシ捕獲数	イノシシ捕獲効率 (頭/わな日)
12cm	59頭	0.015	13頭	0.003
15cm	94頭	0.011	26頭	0.003

ほぼ同じ

検証結果2 15cmより12cmの方が錯誤捕獲発生確率は極めて低い

輪の直径	錯誤捕獲件数	錯誤捕獲発生頻度 (回/わな日)
12cm	1回	0.0002
15cm	13回	0.0015

12cmは15cm
の約7分の1

作成した普及用パンフレット
(島根県のホームページで公開)

■ 技術名：センサーカメラを活用した踏み場所の特定による、効果的なくくり罠捕獲実証（ニホンジカ）

■ 実証地域：下関市

■ 実証時期：令和7年11月～令和8年1月

■ 委託先：（株）野生鳥獣対策連携センター

1. 事業の背景・課題

- 山口県西部を中心に、ニホンジカの生息頭数は増加傾向であり、生息頭数も拡大傾向にある。特に下関市は、令和3年度までニホンジカの保護のため「くくり罠架設禁止区域」に指定されていたことから、くくり罠の普及率が低い。
- ニホンジカの捕獲強化のため、ICT機器（IoTセンサーカメラ）を活用したくくり罠による効率的な捕獲方法を実証し、捕獲マニュアルを作成・普及することで、くくり罠の導入拡大に繋げる。

2. 事業の結果・効果

① 獣道上の歩行観察によるわな設置位置選定方法の検証

・わなを設置する前に、獣道をシカが歩く様子をカメラ撮影により、シカがよく踏む場所を選定し、わなを設置→延べ17基の設置、うち9基のわなで10頭のシカ及び1頭のイノシシを捕獲

② 障害物を活用したわな設置位置の選定方法の検証

・獣道上においた障害物になるものを選定し、シカが足を置くと想定される位置にわなを設置→9基のわなで10頭のシカ及び2頭のイノシシを捕獲

③ エサによる誘因捕獲の検証

・ヘイキューブとカメラを設置し、有効性を確認→シカの誘因効果はあったが、イノシシの群れにより、わなの掘り返しが頻発

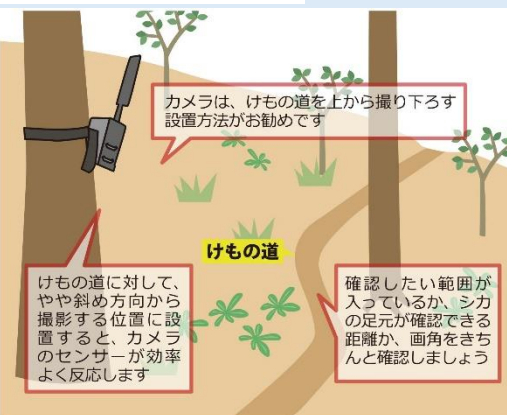
3. 事業の評価結果・改善点等

○IoTセンサーカメラを活用した場合、以下の利点を確認できた。

- ・シカが良く通っている道の選定に活用できる。
- ・シカが良く踏む場所を確認し、わなを設置する場所の選定に活用できる。
- ・見回りの代わりに活用できる。
- ・わな設置位置の補正に活用できる。

○IoTセンサーカメラを活用した効率的な捕獲マニュアルを作成しHP上で公表した。今後はくくりわな初心者に向けた各種研修会で活用していく。

カメラの設置方法



シカがよく通る獣道を選定できているか確認



7日間で、少なくとも22頭のシカが、この獣道を通過

シカがよく踏む場所を確認し、わなを設置する場所を選定



シカが3回以上、並足で踏んだ場所にわなを設置し、その2日後に捕獲

- 技術名：誘導柵を用いたくり罠捕獲技術の実証（ニホンジカ）
- 実証地域：耶馬日田英彦山国定公園
- 実証時期：令和7年5月～令和8年2月
- 委託先：株式会社九州自然環境研究所

1. 事業の背景・課題

- ・ 福岡県の耶馬日田英彦山国定公園では、平成28年度からシカの捕獲事業を継続実施しており、スレジカが発生する中でいかに捕獲効率を高めるかが課題となっている。
- ・ シカは、できるだけ障害物を避けて楽に移動できるルートを好んで利用する習性があることが知られており、「跨ぎ」や「寄せ木」などの技術はこれを利用したものであるが、いたずらに障害物を配置すればかえって捕獲効率を下げてしまう恐れがある。
- ・ そこで、耶馬日田英彦山国定公園において、シカの誘導用の簡易柵を設置することで、シカの行動を制限し、捕獲効率を高めることができるのかを実証検証する。

2. 事業の結果・効果

- ①捕獲実証実験
 - ・ 馴化期間を挟み、2回の捕獲期間で捕獲（①225基日、②140基日）を実施した結果、実験地1（落葉広葉樹林の谷部の緩傾斜地）で9頭、実験地2（落葉広葉樹林の斜面）で3頭、実験地3（人工林の尾根部の緩傾斜地・平坦地）で1頭の合計13頭捕獲した。
- ②誘導柵に対するシカの行動の確認
 - ・ 3種類の誘導柵（防護ネット、遮光ネット、鳥獣ネット）を用いた結果、視界がほぼ遮られる遮光ネット柵はシカの警戒心が高まり接近しなかった可能性があるが、捕獲効率等については、誘導柵の素材の違いによる差はみられなかった。
 - ・ 休止期間を挟めば、誘導柵により移動が制限されることで、くり罠の捕獲効率を向上させることができると考えられた。
- ③設置場所の地形、環境条件の確認
 - ・ シカの利用頻度の高い場所の緩傾斜地では、誘導柵が有効である可能性があるが、誘導柵を設置する設置場所の選定や誘導柵の張り方に知見や事前調査が必要。

3. 事業の評価結果・改善点等

- ・ 誘導柵とくり罠を組み合わせることで、捕獲効率を向上させることができると考えられる。
- ・ 一方で、誘導柵を設置する場所は、落葉広葉樹林のある緩傾斜地など好適環境に限定され、場所の選定や誘導柵の張り方に知見が必要となる。
- ・ 令和8年度は、誘導柵の素材の違いや捕獲効率等のデータが不足していることから、引き続き、利用頻度の高い環境等において検証を行うとともに、加えて生息密度が低い場所での捕獲方法も検討していく。

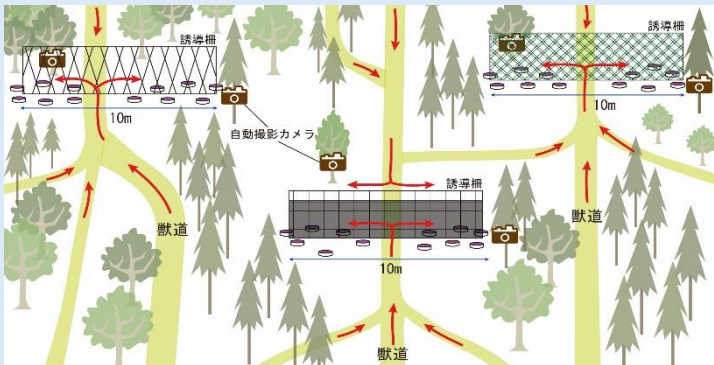


図1 誘導柵を用いたくり罠捕獲技術の検証イメージ



図2 誘導柵設置状況

実験地	種類	捕獲期間①				捕獲期間②			
		捕獲期間 (日)	わな基数 (基)	捕獲頭数 (頭)	捕獲効率 (頭/基日)	捕獲期間 (日)	わな基数 (基)	捕獲頭数 (頭)	捕獲効率 (頭/基日)
1	防護ネット柵	9	5	3	0.067	7	5	1	0.029
	遮光ネット柵	9	5	2	0.044	7	5	1	0.029
	鳥獣ネット柵	9	5	0	0	7	5	0	0
	比較地	9	5	2	0.044	7	5	0	0
2	防護ネット柵	9	5	2	0.044	-	-	-	-
	遮光ネット柵	-	-	-	-	7	5	1	0.029
3	防護ネット柵	-	-	-	-	7	5	0	0
	遮光ネット柵	-	-	-	-	7	5	0	0
	鳥獣ネット柵	-	-	-	-	7	5	1	0.029

図3 実験地ごとの捕獲効率

- 技術名：人工塩場等を利用した囲いわなによるメスジカの誘因捕獲
- 実証地域：芦北・阿蘇地域（国有林・県有林）
- 実証時期：令和7年9月～令和8年3月
- 委託先：九州自然環境研究所

1. 事業の背景・課題

- ・ 県ではシカの捕獲数は増加傾向にあるものの、オスの捕獲数が多く、メスを選択的に捕獲するなど、捕獲の質の向上が課題となっている。
- ・ 誘引物質として、塩水が有効である研究成果があることから、当県での人工塩場によるメスの誘因が可能か、また生息密度が高い地域で塩場に誘引されたメスジカの群れを囲いわなで捕獲できる可能性を検証する。

2. 事業の結果・効果

- ① 塩場創出によるメスジカの誘因効果の検証
 - ・ 芦北：誘引確認（メス1頭、オス2頭、幼獣2頭）
 - ・ 阿蘇：誘引未確認（付近にシカの痕跡はあるものの誘引は見られず）
- ② 捕獲実証試験
 - ・ 塩場付近にわなを設置することでメスの誘因捕獲の可能性を検証した。
 - 芦北：捕獲数はメス0頭、オス0頭
 - 阿蘇：捕獲数はメス0頭、オス0頭

3. 事業の評価結果・改善点等

- 捕獲に至らなかった要因として、
- ・ 実施期間が最も効果が高いとされている4月～7月から外れていたことが考えられるため、実施時期の精査が重要である。
 - ・ 同時期に森林施業や狩猟・有害鳥獣捕獲が実施されていたため、それらと重ならないような設計が重要である。
 - ・ ニホンジカの馴化期間が短かったため、十分な期間の確保が重要である。



実施区域



塩水設置



誘引されるニホンジカ

- 技術名：組み立て式囲いわな及びAIゲートを活用したニホンジカ等の捕獲
- 実証地域：大口鶴田鳥獣保護区（薩摩郡さつま町）
- 実証時期：令和7年11月～令和8年3月
- 委託先：一般財団法人鹿児島県環境技術協会

1. 事業の背景・課題

本県では、くくり罠を用いた捕獲が多い状況である。くくり罠は、通常わな1基につき1頭しか捕獲ができず、群れで行動するニホンジカなどの場合に学習ジカを発生させる可能性がある。近年、ICT技術の普及に伴い、AIを搭載した囲いわなが開発され、設定した頭数以上がカウントされたらゲートを自動で閉鎖し、群れ単位のニホンジカやイノシシの捕獲が可能になった。

そこで、同技術をモデル的に導入し、効率的かつ効果的に群れ単位のニホンジカ及びイノシシの捕獲手法を検証する。

2. 事業の結果・効果

【実証内容】

令和6年度に得られた課題及び改善点について検証を行う。

1 囲いわなの大きさについて

囲いわな内に侵入する個体は警戒心の低い雄個体が多く、餌を独占する様子も撮影され、その様子を雌成獣と幼獣が見ており、囲いわな内に侵入しにくい状況が確認された。そこで令和6年度に実施した4m×4mから8m×8mに大きさを変更し、検証を行う。

2 傾斜地に応じた囲いわな部材について

奥山地域においては、平坦地が少なく傾斜地が多い状況であり、従来の囲いわなでは平坦地にしか設置できない状況である。そこで、傾斜地において立木と獣害ネットを活用した囲いわなを製作し、捕獲の検証を行う。また、従来の囲いわなと比べ設置に要する時間や耐久性などについても検証を行う。

3. 事業の評価結果・改善点等

現在、実証地域内に4機設置（通常囲いわな4m×4m、8m×8m 傾斜地囲いわな4m×4m、8m×8m）しており、囲いわな内にニホンジカの侵入が確認されている。
最終的な検証については、実証期間終了後となる。



図1 実証地域位置図



図2 組み立て式囲いわな及びAIゲート一式と捕獲に係るフロー図

- 技術名：島嶼部における外来イノシシの根絶に向けた効果的捕獲手法の検討（イノシシ）
- 実証地域：慶良間諸島（渡嘉敷村、座間味村）
- 実証時期：令和7年5月～令和8年2月
- 委託先：一般財団法人沖縄県環境科学センター・株式会社島嶼生物研究所共同企業体

1. 事業の背景・課題

- 座間味村の阿嘉島では、イノシシより天然記念物であるケラマジカ（以下、「シカ」とする）が多く生息し、誘引狙撃地点においてイノシシより先に餌を盗食するため捕獲が困難となっている。シカが錯誤捕獲される可能性が高いため、従来のわなによる捕獲は効率的でない状況である。
- これまでの捕獲作業時のモニタリングの結果から、出産期（4～6月）の成獣メスは警戒心が強く行動範囲が狭くなり、誘引地点に出没しないと懸念された。これら個体を捕獲することで、イノシシ個体群の効率的な排除に繋がると懸念される。

2. 事業の結果・効果

①給餌ボックスの有効性の確認

- イノシシのみが開閉可能と懸念された給餌ボックスを用いて選択的にイノシシ3頭を捕獲できた。
- シカが自力でボックスを開ける様子は確認されなかったが、イノシシが掻き出した餌をシカが横取りする様子が確認され、シカに被弾する可能性があるため捕獲が実施できない事例があった。

②埋設餌の有効性の確認

- 埋設による給餌方法では、シカの出没は確認されたが盗食はなく、選択的にイノシシ8頭を捕獲することができた。しかし、誘引後に電動掘削機を使用したことにより、警戒心が高まった個体が出没しなくなったという課題も生じた。

③出産期の捕獲におけるサーマルドローンの活用

- 出産期である5月に検証したところ、草地で3個体、森林域で2個体を探知することができ、それぞれの植生において適当と懸念される飛行高度、カメラ角度を検証することができた。

3. 事業の評価結果・改善点等

- イノシシを選択的に捕獲することができる埋設餌の手法について、課題を解消するとともに、同じく選択性のある給餌ボックスと組み合わせた捕獲の実証を行いたいと考えている。
- 今回検証したサーマルドローンを活用し、カメラの撮影頻度が増加しているにもかかわらず捕獲が進んでいない地域において、イノシシを探知し、効率的な捕獲手法の検討・検証を行いたいと考えている。



①給餌ボックスの有効性の確認（餌を横取りするシカ）



②埋設餌の有効性の確認（埋設餌を採餌するイノシシ）



③出産期の捕獲におけるサーマルドローンの活用（サーマルドローンで探知したイノシシ）

